

広島県浄土寺所蔵「仏涅槃図」再考

鯨井 清隆 (早稲田大学)

本発表では、広島県尾道市の浄土寺に所蔵される国指定重要文化財「仏涅槃図」(以下浄土寺本)を取り上げ、画面に描かれたモチーフや表現方法について考察を行う。またそれと共に、先行研究で取り上げられることのなかった、旧軸木に記された銘文を再検討する。以上2つの観点から、浄土寺本がどのような制作背景を持つのか、またどのような意図の下用いられたのかについての試論を提示することを主目的とする。

浄土寺本は、中央に釈迦が涅槃に入る情景を描き、その周囲に説話を配する涅槃変相図の一種である。その説話は、当麻曼荼羅図のように、画面の周囲に区画が設けられて整理され、16もの場面が描きこまれている。これほど多くの説話が描き込まれた涅槃図は異例である。昭和45年度の修理の際に発見された旧軸木の銘文には、「文永十一年粉河寺僧随覺房生年四十年也七月十日」と記されており、浄土寺本は鎌倉時代の年記を持つ作例として注目されてきた。浄土寺本に関しては、中野玄三氏や真保亨氏、渡邊里志氏の論考によって、その大まかな図様と、周縁区画に描かれた変相図の主題に関して検討がなされている。しかし先行研究においては、主に周縁区画の説話内容に論点が置かれており、その結果、浄土寺本に描かれる具体的な図様に関してはあまり触れられておらず、また旧軸木に記された銘文の内容に関しても未だ具体的に考察されることはなかった。

そこで本発表では、旧軸木に記された銘文を元に浄土寺本研究の再構築を試みる。まず始めに、浄土寺本の願主である「粉河寺僧随覺房」とは、西大寺中興の祖である興正菩薩叡尊の側近であった「鏡慧随覺房」である可能性を提示する。そして先行研究を踏まえ、現存する文献を精査することで得られた情報を、銘文の内容と比較検討することで、「粉河寺僧随覺房」=「鏡慧随覺房」の蓋然性が高いことを指摘する。その結果、この「鏡慧随覺房」とは、西大寺の中でも特に重要な位置にいた人物であったことが、西大寺に残る『金剛仏子叡尊感身学正記』や『西大勅諭興正菩薩行實年譜』などの、叡尊に関する伝記や文献史料を元に明らかとなった。そして鎌倉時代の西大寺復興における叡尊集団の活動と、浄土寺本に描かれる種々の表現の関連性についていくつか私見を述べる。

以上のことを踏まえつつ浄土寺本を考察した結果、浄土寺本は叡尊を中心とした西大寺一派の思想の影響下で制作された作例ではないかと発表者は考える。そして浄土寺本に見られる様々な表現は、当時の涅槃会の有り様を示しているのではないだろうか。つまり浄土寺本を用いて行われる涅槃会には、鎌倉時代における西大寺再興を背景に、より実利が求められていたのではないだろうか。

以上のような観点から、浄土寺本は旧軸木に記された制作年と共に、当時の涅槃会の本尊としての役割が指摘できる点で、鎌倉時代に制作された涅槃図の基準作として捉え直すことができよう。